

博物館実習生の受入れと友の会活動

～三博協協議会報告から～

府中市立郷土館

学芸員 石川博幸

東京都三多摩公立博物館協議会では、会員館相互の情報交換と親睦を目的に、会員館を持ち回り会場にして協議会を開催している。

本稿では、本年度に実施した過去2回の協議会の中から、2つのテーマについての概要を記すものである。

1. 博物館実務実習生の受入れについて

開催日／昭和58年7月21日 会場／東京都高尾自然科学博物館 出席者／9館15名 事例提供者／府中市立郷土館学芸員石川博幸

まずはじめに、府中市における昭和56～57年度の事例から、①受入れの時期と学年、②実習内容、③終了報告、④事故の取扱いなどについて報告した後、各館の事例を含めて今後の対応などについて協議した。

〈八王子市郷土資料館の例 館長小泉恵一氏〉

実務実習生の希望者は年々増加し、今年は15名の応募者の中から7名を受入れた。条件として、(ア)実習終了後2～3週間のうちにレポートを提出すること、(イ)知り得た秘密を館外に漏らさないこと、(ウ)本人の実習期間中のケガ、展示資料の破損等の責任は大学側が一切の責任を負うこと、を明記した受入れ承諾書等を大学に送っている。

実習内容としては、展示資料への照明、印刷物のレイアウト作業、解説パネル等の配色、文字の大きさ、レタリング作業、資料の収集・返却時の随行、資料撮影の基本、拓本の取り方や刀剣のけん磨等の実務と講義など広範囲に指導している。なお、拓本製作や写真撮影作業に伴うフィルム等の材料費は、実習生の実費負担としている。

〈高尾自然科学博物館の例 学芸員新井二郎氏〉

当館は都内周辺でも数少ない自然系博物館のためか数年前より実習希望者の声があったが、受入れをはじめたのは昭和57年度からである。

今年度は2大学3名を受入れた。いずれも4年生・大学院生である。実習内容の基本は、美術系博物館とは異なって所蔵資料の実情から、標本づくりなど実物に触れさせることを多く取り入れていることである。それは講義や基礎作業は大学で終了していること、また、実習生の中には大学院生が含まれていることから実物により多く触れてもらいたいと考えているからで

ある。

また、自然観察会などの野外教育活動時の学芸員の補助要員として同行させ、教育活動の重要性を現場で指導している。同時に、博物館活動を支えている裏方の努力などを学びとってもらうように心がけている。

以上2館の報告の他に、調布市郷土博物館からは2週間の期間で受入れしている旨の報告があった。

いずれの館においても、博物館実務実習生を受入れる最大の目的は、将来の博物館の良き理解者が育成される機会になればという願いがこめられていた。

〔参考文献〕

博物館実務実習生の受入れと今後の課題—府中市立郷土館の場合—石川博幸『平塚市博物館年報 No.7』1983

八王子市郷土資料館における博物館実習 佐藤広『ミュージアム多摩No.3』1982

2. 東京農工大学工学部附属繊維博物館の教育活動～友の会活動を中心にして～

開催日／昭和58年10月7日 会場／繊維博物館 出席者／13館18名 事例提供者／繊維博物館々長金子六郎氏、学芸員並木覚氏

施設見学、友の会々員の作品展示、サークル活動の見学後、繊維博物館友の会の発足から今日までの経過と運営の概要説明がなされた。

友の会は、昭和53年春の特別展を契機に「友の会準備会」を作り、1年間の準備期間を経て、会員200余人によって昭和55年1月に発足した。

初年度に会員を中心に館内集会を主にした①集會活動、2年目にはより熱心な会員の研究活動を目的とした②サークル活動をスタートさせ、3年目には館主催の特別展などに参加する③ボランティア活動へ発展した。現在では、以上の3活動の会員300名を数える。会員の90%が女性であることが特徴の1つである。

昭和56年度以降、集會活動では講演会12回・催し物2期間・見学会1回を、サークル活動(定員20名)では、つむぎ研究会・組ひも研究会など5研究会が活動中、ボランティア活動では毎年2月のサークル作品展への出品と解説・ビデオ機器の保守・フィルムの製作などを行なっている。

サークル活動の場所は館内の専用室のほかに、展示室内にも見受けられた。金子館長の言う「サークル活動は生きた展示である……」が実践されている。

友の会活動の利点として、来館者への展示解説・質

〈附録〉 全国博物館園友の会等実態調査報告

次表は、昭和58年6月に府中市立郷土館が実施したアンケート調査(2000㎡前後の館を対象)の抜粋である。参考になれば幸いである。

区分	回答館	友の会			他団体			ボランティア			
		あり	なし	不明	あり	なし	不明	あり	なし	不明	
総合	県	12	4	7	1	2	9	1	0	11	1
	市	5	2	3	0	2	3	0	0	5	0
	私	2	2	0	0	0	2	0	0	2	0
	計	19	8	10	1	4	14	1	0	18	1
歴史	県	16	6	10	0	2	14	0	0	16	0
	市	31	9	22	0	4	27	0	0	31	0
	私	10	1	9	0	3	7	0	2	8	0
	計	57	16	41	0	9	48	0	2	55	0

問への応答が容易にできることなどが参考となった。

〔参考文献〕

“友の会”発足と運営 並木覚『全科協ニュースVOL 12No 2』・『ミュージアム多摩 No4』

風土記	県	6	2	4	0	0	6	0	1	5	0
美術	県	22	13	9	0	6	16	0	4	18	0
	市	9	4	5	0	1	8	0	2	7	0
	私	6	2	3	1	1	4	1	1	4	1
	計	37	19	17	1	8	28	1	7	29	1
理工	県	2	1	1	0	1	1	0	1	1	0
	市	15	7	8	0	4	11	0	2	13	0
	私	10	3	7	0	1	9	0	0	10	0
	計	27	11	16	0	6	21	0	3	24	0
自然史	県	2	0	2	0	0	2	0	0	2	0
	市	2	0	2	0	1	1	0	1	1	0
	私	1	0	1	0	1	0	0	0	1	0
	計	5	0	5	0	2	3	0	1	4	0
合計		151	56	93	2	29	120	2	14	135	2

小泉さん 安らかに

このところ、「時よ!とどまれ。」と想うことが折ふしあります。

昭和58年12月7日。この日がそうであります。

スペインの首都マドリードのバラハス空港での事故で、日本人乗客「八王子 小泉恵一」との報道に、私たちは、全く目と耳をうたがいました。そして、とにかく、「生きていてください。」というのが、私たちの切なる願いでありました。

日が経つにつれ、私たちの心は、重くなって参りました。

12月19日に無言でお帰りになりました。「お帰りなさい。」



小泉恵一氏へ感謝状贈呈 (S58.10.7)

東京都三多摩公立博物館協議会 会長 朝倉雅彦

私たちは、深い哀しみの中にありながらも、どうしても信じられない気持ちが心の中をよぎるのであります。それは、つい先だつての10月7日に東京農工大の繊維博物館で、私たちは、あなたへ、これまでの三多摩博物館の発展のためのご尽力に感謝状を差し上げました。その時のお喜びになられましたあなたのお顔を昨日のこのように覚えているからであります。

かえりみますとあなたのご熱意のあるご提案により、昭和49年8月16日に三多摩博物館の館長会が誕生し、その後、「東京都三多摩公立博物館協議会」へと発展し、今日にいたっております。この間、あなたは、常に私たちのリーダーとして、はかり知れないご指導をしてくださいました。

この9月30日に突如として私たちは思いましたが、八王子市郷土資料館長の職をご退職なされました。この時も私たちは、びっくりしました。そして、間もなく……。

「どうして。」と申し上げるところであります。

小泉さん あなたの御人柄、そして博物館への高邁な魂と限りない情熱は、私たちの心の中に生きております。

東京都三多摩公立博物館は、たくましく生きて参ります。

小泉さん どうか、安らかに、ご永眠ください。

(府中市立郷土館長)

最近の展示から

東京都高尾自然科学博物館 学芸員 新井二郎

東京都の自然、特に三多摩の自然は、地形や気候条件だけでなく、人間活動も加わって実に多様である。そのような自然を相手に、東京都高尾自然科学博物館では活動を続けている。自然の変化に富む高尾山の麓にあり、入館者の大部分が高尾山に来た人達となれば、高尾山の自然を展示にもってくることはもちろんであるが、都立唯一の自然史系博物館としては、東京都の自然(三多摩が中心となるが)の中から新たに知見が得られればそれも展示に取入れていかなければならない。学芸員が常勤・非常勤各1名という小規模館にとっては、三多摩の自然はあまりにも大きくまた奥深いものだといつも思い知らされるが、多くの人達の協力もあって、活動が続けられ、資料や情報もいろいろと集まってきている。

そうした中で、開館してからすでに15年以上も経過すると、展示もその内容や傷みなどいろいろな部分で更新を考えなければならなくなってきている。

そこで、最近当館で更新した、また新たに製作した展示を紹介してみる。

まず、この1月から展示公開したのは、2階展示室の「ムササビの森——夜の高尾山——」というテーマのジオラマである。博物館には開館直後から「夜の動物たち」をテーマとしたジオラマがすでにあったのだが、長い間にその傷みがひどくなり、哺乳動物の剥製も補修しようのない状態となってしまった。そこで、新たに製作しなおすことになった。製作に当たって、ジオラマの内容が検討された。これは生態展示でいつも問題となることであるが、一つの環境の狭い範囲内にたくさんの動物を入れすぎるということである。夜行性動物をいろいろと見せたいと考えると、きわめて狭い場所にたくさんのものが集まりすぎて、実際にはとてもありえない不自然なものになってしまう。しかし、実際の場面を想定すれば、せいぜい2種類ほどの動物がポツンといるだけとなって、きわめてさびしいものとなる。そこで、今までの展示に入れていた動物から、何種類かにしぼって数をへらすことにした。それでも、実際の場よりもやはり多くなってしまった。

夜の高尾山は、比較的容易に、ムササビが見られる



ジオラマ展示「ムササビの森」

ことで知られており、観察者も多いことから、ムササビを中心としたジオラマにすることに決った。ムササビの特徴は、前後の足の間に飛膜があり、それを広げてグライダーのように滑空することである。それなら滑空の様子を再現しようということになった。一番簡単なのは、滑空の姿勢のものを糸などで釣り下げることである。当館で、これまでもとっていたやり方であるが、それでは動きがない。他館で、ムササビが小さな円を描いてぐるぐるまわっている展示を見せてもらったが、これは滑空ではなく、ムササビ中心の展示には使えそうになかった。樹幹をよじのぼり他の木へと滑空するのであれば、背後にムササビのホームグラウンドである高尾山の森がある当館の展示としては困るのである。いろいろと検討してみたが、木をよじのぼり、さらに滑空するまでを剥製でやることは技術的にむずかしいということになり、結局木から木へ滑空していく一瞬の姿が見られるようにすることで決まった。こうして、「ムササビの森」をテーマに、夜の高尾山の森で活動するムササビ(滑空していくもの・巣穴から顔を出したもの・採餌しているものの3体)を中心に、フクロウ、テン、タヌキを加えたジオラマができあがった。その環境は、ケヤキの大木、アラカシ、アオキなどをレプリカ製作したもので、かなり精密にできている。見学者がスイッチを押すと、ムササビが樹々の間を滑空してゆき、背景の裏側に入って電源が切れ、またスイッチを押せば滑空する、という具合である。ムササビの滑空を可動式にすることでは、製作者とかなり検討し、工夫したのであるが、できあがってみると決して十分なものではない。しかし、昼間高尾山を訪れる人達に、夜の動物たちの様子を少しでも知ってもらえれば、と思っている。

このジオラマの横は、昼の哺乳類のジオラマである。こちらは予算の都合で次年度まわしとなって、隣りの新しさから、よけいに不備なところが目立つが、あと半年もすれば「東京都のけもの」として、東京都に生息する哺乳動物の主なものが、ムササビを中心とした隣りのジオラマを補う形で展示される予定である。

この他、1階には、五日市で発見されたステゴドン・ボンビフロンスの化石骨のレプリカを展示した「日本最大級の化石象」のコーナーがあるが、これに加えて、現在、ナウマン象の展示計画が進んでいる。日本橋浜町の地下鉄工事現場から見つかったナウマン象の化石は、日本で二番という頭蓋骨を含めて、きわめて貴重な部分が掘りだされ、当館に収蔵された。この化石骨を3年計画でレプリカ製作し、昭和60年度末には全身骨格が復元されて展示される。既設の展示物の中から、このためのスペースをとるのに困ってしまう。

中国西域の博物館を見学して

筆者は今夏、中国西域各地の遺跡・石窟寺院・博物館等を見学する機会に恵まれた。ここではその際訪れた博物館の展示活動を中心に紹介し、併せてその感想を述べてみたい。

先ず初めに中国の博物館の制度の面について簡単に触れておきたい。

中国では省・自治区、地区、県、市、郷といった行政単位に分かれている。このうち省・自治区にはそれぞれ博物館が設置されており、また地区、県、市では文化財が多く残っているといったような場合に必要に応じて設置されているようである。これらはいわば地域博物館としての機能を果たすもので、主としてその地域の「文物」即ち有形文化財の調査、保護、収集、展示及び教育普及等を中心的な活動としている。これに対して国務院文化部文物局が管理する故宮博物院、歴史革命博物館のように、中国全土の「文物」を扱っている博物館もあり、これは我国の国立博物館的な性格を有するものといえる。また県等では「文化館」と称する音楽、演劇、舞踊といった文化的なもの一般を扱う「文化センター」のような施設も設置されている。ここには展示室もあり美術等の企画展示がよく行われるということである。

組織面では、中国の博物館の運営は管理部門の「行政」と学芸部門の「業務」に分けられている。「行政」は各地方政府の指導下にあり、「業務」は指導する博物館の下に置かれるという「双方指導」体制をとっている。「業務」についてもう少し具体的に見ると、例えば県の博物館の調査で新たな遺跡が発見されたような場合、その地区の博物館に報告され、更に調査を要する場合には、その指導の下に合同で進められるということである。この結果は省の博物館に報告された上で、更に国務院文化部文物局に報告されることになる。

展示の上では基本的には各博物館の展示は各地域の文化財を中心に、その地域の歴史、文化を紹介しようとする常設展示を行っているため、中国全土の様々な文化財について見学したいような場合のために、種々の企画展を全国の省・地区博物館に巡回させるように

町田市立博物館

学芸員 加島 勝

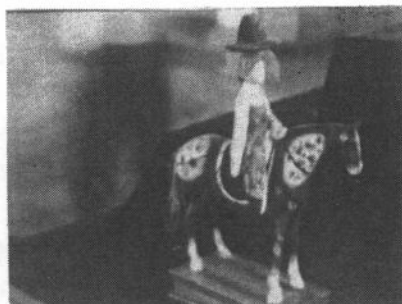
しているとのことである。また海外の文化財の紹介のためには、主に美術品を扱う国務院文化部の「中国对外展覽公司」やその他の文化財を扱う同部文物局の「中国文物对外展覽公司」が中心となって展覧会を企画している。

以上が中国の博物館の基本的な考え方ようである。以下今回見学した博物館のうち、新疆維吾爾（ウイグル）自治区博物館と甘肅省博物館について述べてみたい。

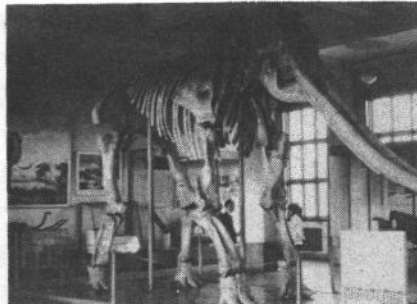
先ず新疆維吾爾自治区博物館は、区都烏魯木齊（ウルムチ）市街の略中央に所在する。区内で出土した新石器時代から近代までの文化財が展示されているが、中でも漢代から隋・唐時代にかけての遺品には絹製品の文様等に西方色が強く感ぜられた。またたくさんの鏡の中には、我国にも伝えられている海獣葡萄鏡もあり、更に吐魯番（トルファン）出土の唐三彩の馬や剪紙の文様の中にも我国の飛鳥から天平時代に見られるものがあり、当地がいわゆるシルク・ロードの要衝にあったことが理解された。

展示方法は時代順に陳列されており、順路に従って見学してゆくと新疆の歴史が概観できるようになっている。各展示品の前には名称・時代・出土地を示したプレートが置かれている他は、壁面に簡単な年表や地図が貼られているぐらいで、特別な説明パネルやディスプレイは設けられていなかった。

甘肅省博物館は省都蘭州の西部にある。甘肅省の辺は黄河上流の文明地帯にあるところから、旧石器時代仰韶文化、西周春秋時代から明代に至るまで脈々と続く各時代の展示品が陳列されており、一堂に会する様は壯観そのものであった。特に夥しい数に上る陶磁器製品は各時代ごとの様式や形式によって類型化され、年代順に分り易く陳列されていた。また始原時代の展示室も別に一室設けられ、そこには約200万年前に生存していたと推定される黄河剣齒象の高さ5メートルはあろうかという実物大の模型が展示されていた。ここでは我国でよく見かけるのと同様に、たくさんの子供たちが驚きの声をあげていた。博物館の建物の横に



唐三彩(吐魯番出土)
新疆ウイグル自治区博物館



象の模型
甘肅省博物館



嘉峪関に立っている「全国重点
文物保護単位」

は、河西走廊・嘉峪関で出土した魏晋時代の壁画墓が、そっくりそのままの形で移築され保存されていた。この壁画には当時の日常生活の場面が描かれており、絵画史のみならず、歴史・民俗史等様々な見地からも貴重な資料としてよく知られているものであるが、館内には更に原寸大の模写も露出展示されており、その細部を文字通り手にとるように見る事ができるよう配慮されていた。

以上2つの地区・省博物館の展示状況を簡単ではあるが述べてみた。最後に実見しての感想を述べてみたい。

先ず第1は、「物」中心の展示であるということである。展示室内での説明は恐らく意識的に少なくしてあるのであろう。しかし、展示を順に見てゆくと確かに何千年かの歴史がはっきりと感じられるのである。これが「物」の語っていることなのだろう。そしてそれを見る側の人間が各自の言葉に置き換えてゆく時、そこに博物館の意義が成立する。そういった展示方法のように思われた。筆者自身普段、日本で展示を見る時に、「物」を見るよりも先に「説明」を読んで、それですましているようなことがあったのではないかと反省させられた点でもあった。

第2には、国をあげての文化財の保護・保存の体制

職員紹介

盛吉 順一 さん
(八王子市郷土資料館長)



“もりよし”という姓がまず印象的だ。

八王子市の電話番号簿の中に2名あるのみ。その1名は本人で、他の1名は親のもの。親たちのふる里は沖縄。覚えやすい姓だが誤って書かれそう。

初対面で印象的なことがもう一つ、ガッチリとした

身体、小学生のときから野球で活躍し、スポーツできたてである。今はもう息子たちに、その精神と運動神経は伝えられ、もっぱらよき後援者となっている。

昭和58年10月、館長に就任。元から資料館と無縁な方ではない。

学生時代は人文地理を専攻し、八王子のまちについての卒論をものにした。学生のころからの歴史や文化への関心が、今また大きくなっている。読書家でもある。また、南国の人柄は、職場の上下関係を忘れさせることもしばしば。

ともかく、さらに大きく飛躍する博物館活動をと、新鮮な目で秘策をねりつつある。御本人への忠告を最後にひとつ、甘いものはほどほどに。みなさん、酒はすすめないで下さい。(Sa)

も注目されたところである。甘肅省博物館の嘉峪関出土壁画墓の移築はその例であったが、見学して歩く先々で、遺跡・石窟寺院等それ全体が「全国重点文物保护单位」として指定されていることに気づいた。中国ではこの国务院の制定するものの他に、各省・自治区、地区、県、市でもそれぞれ「保護単位」を制定しているとのことである。そしてそのために日常の博物館活動が大きく意義を持つてくるのであろう。

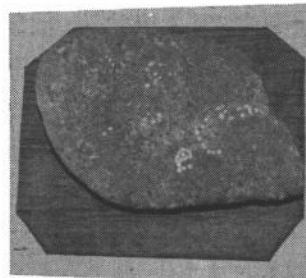
第3には、各地の博物館で子供たちが勉強している姿である。友達同志で遊びに来ていたり、あるいはクラス単位ぐらいで学校の授業として来ている光景も見られた。甘肅省博物館で見た象のことを子供達は恐らく生涯忘れることがないのではなかろうか。博物館の展示に携わる者として、子供達に何を受けてもらえるかということは筆者自身今後の課題としてゆきたいと思う。

以上簡単ではあるが、中国の博物館の展示について2例を取り上げて述べてみた。

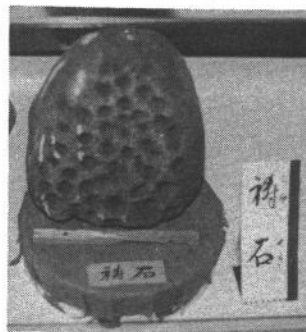
尚、本稿を書くに際し、中国の博物館の制度のことに付いて中国人民共和国駐日本国大使館文化部何清氏より御示教戴きました。記して謝意を表するものです。

新収蔵資料紹介

瑞穂町郷土資料館蔵
点刻石



点刻石



禱石

なにげなく資料館収蔵庫の片隅にころがっていた石が、点刻石であるという。川崎真治氏(歴史言語学者)が見え、ひょんなことから発見された。『歴史読本—日本人のルーツと謎』(58年9月号)によれば、図は東京都西多摩郡瑞穂町郷土資料館蔵の縄文時代の点刻石で、“目、とゝ水、が巧みに彫られていた。欧米考古学の例にならって、白墨微粉末水溶液をたらして数分後に撮影したが、みごとにゝ泪、(祈)が浮かび上ってきた。このままの姿で目下展示中なので、興味ある方はぜひごらんになって下さい(八高線箱根ヶ崎駅下車)。と紹介してある。

禱石

無数にえぐってあけられた穴の石。火を起こす石かと思つたが、祈りに関係ある古代人の禱石だそう。

(宮崎)

〔昭和58年度展示活動報告〕

館名	展示会名	期間	内容
奥多摩郷土資料館	小河内の郷土芸能	53.4~58.3	小河内の郷土芸能(都指定文化財)獅子舞、鹿島踊、車人形、花神楽を展示。
	倉沢山大権現と社家展	58.4~58.6	倉沢鐘乳洞を本殿とする倉沢山大権現の歴史と社家坂和氏の持仏を展示。
	小河内の郷土芸能	58.7~	小河内の郷土芸能(都指定文化財)獅子舞、鹿島踊、車人形、花神楽を展示、
	山村の生活用具(常設)	53.4~	国指定重要文化財「小河内の山村生活用具」を中心に山村の生活の様子を道具によって展示。
	奥多摩の蝶	56.4~	奥多摩の蝶を標本によって展示。
調布市郷土博物館	郷土学習展	58.1.5~4.10	江戸時代から近代に至る調布の道路、町並の発展農業と水の問題に主眼的をしぼり、各時代の地図を展示する。
	地図に見る調布の移りかわり		
	テーマ展 川と生活	58.4.19~7.10	市内には多摩川をはじめ、その支流やこれらを涵養する水源もあり、他地域に比較して生活とのかかわりは大である。この展示は、こうした生活環境の一要素として河川を理解する。
	夏季特別展 郷土のスポーツ・百年のあゆみ	58.7.20~9.30	郷土にかかわりのあるスポーツを中心に、近代スポーツのあゆみをたどり、「スポーツと語らいのまち調布」について広く市民に訴える
	テーマ展 調布の村まつり	58.10.12~12.18	戦前までの村の鎮守の祭礼をとりあげ農民の娯楽として行事、芸能を資料により紹介、農村におけるまつりの意味を考える。
	郷土学習展 村から町へ	59.1.5~4.8	明治以来の行政区画の変遷と、生業や人々のくらしぶりなどの都市化につれて変貌する郷土のようすを紹介する。
	季節展示 奥多摩の植物	58.5.1~6.30	奥多摩の植物相の紹介(8年間の植物調査のまとめ)。
東京都高尾自然科学博物館	ジオラマ ムササビの森-夜の高尾山	59.1.5より公開	高尾山のムササビの生態展示(ジオラマ内のムササビが滑空するようにしてある)。
	季節展示 植物の冬越し	58.11.1~11.30	植物の冬越しの様子(ロゼット葉を主に)を標本と写真で紹介する。
	特別展 布を切る・ぬう	58.5.14~5.22	裁縫用具とミシンの変遷。
東京農工大学工学部 附属繊維博物館	浮世絵名作展	58.11.5~11.13	蚕織錦絵と生糸商標。
	ミニ展 昭和初期の木版画	58.2.15~5.2	昭和初期の日本古来の和紙に何色も重ねた木版画(マッチラベル)260点を展示。
	生糸レット展	58.5.2~6.30	大正期の商標120点を展示。
	ひも結び四尺五寸のバリエーション	58.7.1~9.3	帯メ(四尺五寸)の紐をもって花や蝶の結び創作品280点を展示。
	実習生による織物模型展	58.9.5~10.15	1983年夏、学芸員実習生35名による織物模型24点を展示。
	草や樹で手づくりかご展	58.10.20~	野山に謳う生きるよろこび——草や木でつくったかご40点を展示。
			11.25

八王子市郷土資料館	明治期のタペストリーデザイン展	58.11.30～ 59.1.31	日本で初めて生産されたカーペット星紙のデザイン50点を展示。
	東京の娯楽—多摩地域を中心として	58.6.12～ 58.7.20	近現代に多摩地域の人々に親しまれてきた演芸、説経節、映画、芝居、相撲などをとりあげ、それらの娯楽を受け入れて楽しんだ時代や人々、あるいは娯楽そのものについて考える。370点展示
	3・4世紀の東国—揺れ動く謎の時代	58.10.12～ 58.11.26	3世紀後半から100年余りの間は全く記録のない謎の時代である。最近になって、この時代の関東の社会は東海、畿内などから強大な影響を受けて大きく揺らぎ、古境の出現してくることがわかった。古境出現期の関東の揺れ動く社会と、その社会へ与えた西方の影響をテーマに展示。360点展示
東村山市立郷土館	人物コーナー「遠山雲如」	59.2.7～ 59.3.27	江戸末期の漢詩人、遠山雲如を紹介。雲如は、安政2年八王子に塾を開き、国学者落合直澄、蘭方医秋山佐蔵ら当時の多くの文化人に影響を与えた。
	こどもの遊び展—自然の中のわらべたち	58.5～展示中	私たちのまわりをみますと、いつのまにか大きなビルやたくさんのお家が建並び、少し前までみられた林や畑がすっかりなくなってしまいました。今から30年くらい前までは、子供たちが野原や畑のあちらこちらを駆けめぐり、みんなでどろんこになって遊んでいました。遊び道具にしても、今のように電池や電気で動くおもちゃではなくて、木や竹を利用して作った手づくりのものがほとんどで、その中には古くから伝承されてきたものがたくさんありました。これらの遊び画をパネルにして掲示するとともに、手づくりのおもちゃや道具を展示しました。
府中市立郷土館	第13回むさし府中の自然展「多摩川の生いたちと自然」	58.7.24～9.4	府中市自然調査の研究成果にもとづく定期特別展。河川をとりまく問題はさまざまである。市民生活の中で、川は減ぼされようとしているのか、生きようとしているのか。多摩川の歴史と自然のしくみ、生活とのつながりに関する資料を展示。
福生市郷土資料室	市民芸術文化祭参加「刀剣展」	58.11.3～11.6	市民芸術文化祭関連展示会。市民所蔵刀剣を展示。
	第2回府中の板碑展	59.3.4～5.2	新蔵の板碑を通して中世の生活と信仰を理解する。
	絵で見る街の移り変わり	58.10.1～10.31	昭和30年代に市内の様々な風景を描いた絵画（水彩画）50点を展示。併せて、現在の風景を写真パネル作成し、変化の様子をさぐることにより、郷土の歩みを確認してみることをねらいとした。
	長沢遺跡展	58.10.1～3.31	市内長沢遺跡の過去7回の発掘調査で出土した遺物を中心に、発掘調査の経過に合わせて展示。
	常設展示「福生市の成り立ちと人びとの歩み」	58.4.1～59.3.31	歴史コーナー 福生の成り立ちと歴史を学ぼう、花粉化石、福生の古環境、多摩川の岩石、先土器時代の文化をさぐろう、縄文時代の文化をさぐろう、弥生時代の文化をさぐろう、古墳時代・古代の文化をさぐろう、武士社会のきびしさを知ろう、文字に記された福生郷をたどろう、農民の暮らしについて考えよう、福生の近代化を確かめよう。

町田市立博物館	どびん展	58.4.19～ 58.5.29	民俗コーナー 福生の民俗とくらしを学ぼう、膳杭倉の役割り、行事と農作業をかえりみよう、手づくりの伝統を学ぼう、しょう油の自家製造、ミキノクチ、養蚕の技術を学ぼう、養蚕の道具 自然コーナー 多摩川の自然を学ぼう、ジオラマ（多摩川の自然を観察しよう、林の生きもの） スライドボックス 福生市の自然、福生市の石仏、福生市の文化財、福生市の今と昔 日常雑器の一つ「どびん」を取り上げ、その歴史と全国各地の窯の作例をたどる。	
	畦地梅太郎版画展	58.6.7～ 58.7.10	市内在住、日本版画界の長老“畦地梅太郎”の代表作を中心に紹介（国際版画美術館準備室収蔵）。	
	なすな原遺跡展	58.7.19～ 58.9.4	全国でもまれなすぐれた縄文後・晩期の遺跡で、これまで類例のないめずらしい土器を多数展示（町田市成瀬）。	
	もめん以前のこと展	58.9.13～ 58.10.23	葛布、藤布、科布などで作られた衣服を中心に展示。	
	江戸の化粧道具展	58.11.1～ 58.12.11	江戸の女性たちが使った数々の美しい道具類と、徳川家康愛用の資料（重文）もあわせて展示。	
	町田の宗教民俗展	58.12.20～ 59.2.19	町田市内で行なわれている年中行事、祭、儀礼など生活に密着した生活習俗を紹介。	
	大津絵展	59.2.28～ 59.4.8	江戸時代近江大津で売られていた土産、大津絵を歴史的に紹介。	
	瑞穂町郷土資料館	「衣」に関する展示	58.4～10	かつて瑞穂町の産物であった箱根縞の着物、染料である藍の草、藍の玉、藍の亀等を展示。
		我が家の宝物展	58.11.1～11.6	町の文化祭に協力。町のご家庭に呼びかけて出品してもらおう。博文・南洲・米庵の書、玉堂の絵数枚など、めったに見られない品を公開。
		「食」に関する器具の展示。	58.11～59.3	祝に関係ある角樽・盆・椀・盃、豆腐製造箱、鍋、釜、徳利、皿等を展示。
武蔵村山市立歴史民俗資料館	常設展「武蔵村山の自然・その歴史・その民俗」	58.4.1～ 59.3.31	考古資料、板碑、古文書、民俗資料など約300点の実物資料を中心に、狭山丘陵の鳥や草花、原始古代から現代にいたる歴史、村山織物の変遷、養蚕、年中行事などに関する展示。	
	作品展「狭山丘陵の草花」	58.8.2～ 58.8.28	昭和57年度行なった子供自然教室において、参加した子供達の作成した押し花、スケッチの展示。	
	「子供達のつくった縄文土器」	59.3.1～ 59.3.31	昭和58年10月に行なった縄文土器づくり教室において作成した縄文土器の展示。	
	写真展「武蔵村山の今昔」	58.11.20～ 58.12.25	昭和58年度から始めた武蔵村山市の歴史的資料（写真）の収集において収集した写真の展示。	

編集後記

「あなたは 博物館の事業にそのすぐれた英知とかがりない情熱をかたむけられ 先人の生活と文化を現代に甦らせる礎石を築かれ 併せて東京都三多摩公立博物館協議会の設立とこの発展にリーダーとして絶大な貢献をされました このご尽力に対し記念品を贈り心から感謝の意を表します 昭和58年10月7日 東京都三多摩公立博物館協議会」——三博協設立提唱者である小泉恵一氏に対する感謝状の全文を掲載して、氏のご冥福をお祈りします。(Yo)

発行：東京都三多摩公立博物館協議会

〒183 府中市宮町3の1

府中市立郷土館内

☎(0423) 64-4111内2031

編集委員：川松康人 近藤晏仲

佐藤 広 横尾友一

印刷：(株)共同印刷所

府中市寿町1-3-10